

# うちの近所 コレイチ

わが町 自慢紹介 15

櫛の神様  
やしな  
八品神社  
貝塚市



## 平安貴族も愛用した 「和泉櫛」発祥の地

平安時代以前から「櫛の神様」として崇拝されている八品神社を尋ねました。

欽明天皇（在位539年～571年）の頃、八種類の櫛づくりの器具を持った異国人が貝塚市二色浜に漂着し、里人に櫛の製法を伝授したのが「和泉櫛」の始まりといわれています。

祖先の徳をたたえ、櫛の神様「八品神社」を建立。古くから櫛挽職人・木櫛商人らに信仰されてきました。1710年（宝永7年）には19人の櫛職人がいて、宮中や貴族

・春日神社などにも納入された記録が残っているとのこと。

「和泉櫛」は明治以降、セルロイド製の櫛が出回り一時衰退しましたが木の持つ温かさが見直され、現在は貝塚市の特産品のひとつになっています。

小さな神社ですが境内には櫛塚があり、展示室は毎月1日・15日の午前9時から12時まで一般開放されていて、「和泉櫛のできるまで」をパネルで紹介しています。つげの原木や製造時に使用する道具類も展示されています。



▲社の玉垣には全国の櫛商店の名前が刻まれています



◀櫛塚も木櫛の製造業者から寄進されたものです



原木から加工まで1年以上をかけてつくられる「和泉櫛」。匠の技が光ります



## 「東京家族」

いま、日本映画を代表する監督といえ、山田洋次の名前をあげるのに異論はないでしょう。それを象徴するように、監督は昨年11月3日、「文化の日」に文化勲章を受賞しました。山田洋次監督の「幸せの黄色いハンカチ」はじめ、多くの作品に感動した読者も多いはず。その山田洋次監督が若い時から尊敬の念を持っていたのが小津安二郎監督です。代表的な小津作品の「東京物語」（1953年作品）を現代に舞台を移してリメイクされたのが「東京家族」です。山田洋次監督81本目の作品であり、また監督生活50周年記念作品でもあります。家族の設定や主要な登場人物の職

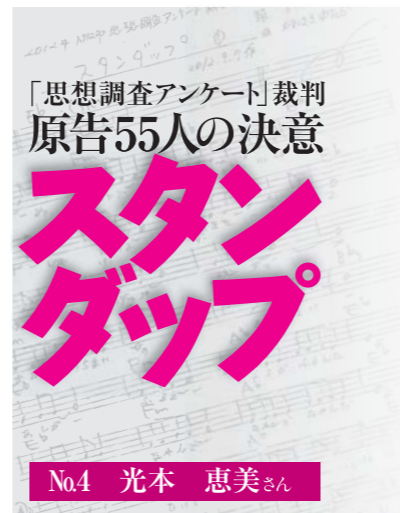
## 古くて新しい永遠の家族物語

業などを少し変えています。登場する人物名をはじめ、基本的な作品の構図はほとんど変えていません。成長した子どもたちと会うため、瀬戸内海の小島から、成長した子どもたちの姿を見たいと上京した老夫婦。東京郊外で開業医を営む長男の家で、長女、次男とも久しぶりで顔を合わせます。滞在中に、親と子はお互いに家族を思いやりますが、次第に生活や思惑のズレがうまれてきます。親子の姿を通じ、家族のきずなと喪失、夫婦や親子、老いや死についての問いかけを描きます。この作品を観る前に、ぜひ小津安二郎監督の「東京物語」を観ることをお勧めします。上映時間146分。

16mmフィルムが

## Culture Navi かるちなーび

### 改めて自分の生きかた 働きかたを考える



No.4 光本 恵美さん



「スタンダップ」はシンガーソングライターのかわさきゆたかさんが作曲した「思想調査アンケート裁判」の応援歌です。

この裁判の原告になる決意をしたのは、労働者として当たり前の組合活動を真っ向から攻撃し、憲法で保障されている内心の自由を侵す内容のアンケートに所属・名前を明記させたいという橋下市長のやり方があまりにもひどいと思ったからです。こんなことがまかり通れば、権力を持つ者は何をやってもいいということになります。何の権力も持たない私たち労働者は自分たちの権利を守ったり、働きがいを感じる職場にするために、みんなの知恵と力を合わせるしかでき

ません。それを悪いことのように職員の一人ひとりの意識の中に刷り込んだ「思想調査アンケート」は許されません。データを破棄したからといって、すまされるものではありません。支援を訴えると「本当にひどいよねえ」「よく裁判してくれました」「原告になるってすごい勇氣やねえ」と、いつも励ましや共感の声をかけてもらいます。そのたびに背中がシャンと伸びる気がします。こんなことがなければ、「労働組合」や「働く」ってこと、そして「自分の生きかた」を改めて考えなかったと思います。裁判とともに、自分自身が成長できるよう、あきらめず闘います。-春は来る 子らの笑顔が 背中おす-

● 天下の物の上手といえども  
● 始めは不堪の聞えもあり  
● 無下の瑕瑾もありき  
吉田 兼好「徒然草」  
誰でも最初は初心者です。天下に聞こえた名人と呼ばれる人も、始めは全くの素人で、大きな欠点もあったのです。始めから物事を上手にできる人などいません。どんな人でも一步一步着実に練習を積むことでしか上達することはできないのです。仕事や勉強ももちろん、うまくいかないからといってあきらめる必要はありません。また、うまくいかない人を見て突き放してもいけません。要は努力しているかどうかなのです。

## いまも心に響く 名詩・名歌・名語録

あしたのころだあ  
小沢 昭一（俳優）

昨年12月10日に亡くなった小沢昭一さんが40年にわたって続けたラジオ番組「小沢昭一の小沢昭一のこと」のエンディングでの決まり文句です。世のお父さんの哀愁をユーモラスに語ったこの番組の根底にあったものは、古きよきものと庶民のくらしへの愛情、そして自身の戦争体験からくる平和への願いでした。落語、浪曲、放浪芸などあらゆる芸能に精通していた老練な語り手は、私たちの明日への活力となりました。